寺子屋の規模は、1校当たり師匠が1人、寺子30人から50人ほどでした。読み方・習字は、「いろは」から始まり、「数字」「十干（じゅっかん）・十二支・方角」さらに坂部村・板山村などの村の名前を書きつらねる「村名づくし」、尾張国・美濃国などの「国づくし」などを習いました。『商売往来』『庭訓往来（ていきんおうらい）』などを教科書に用いて勉強しましたが「往来」というのは、もともとは往復の手紙のことで、文字の読み・書きも実用と結びついていたのです。

手習いを中心にした関係から、学問の神様とされる天神さまに対する信仰が厚く、毎月25日は、天神さまの祭日として、筆を飾り、お神酒などを供えて参拝したあと、終日楽しく遊ぶのが恒例でした。白沢村の北原天満宮にある筆塚は、寺子たちが習い古した筆を献上して、習字の上達を祈願した風習の名残です。

阿久比の寺子屋

No	明治初村名	名称	師匠氏名	身分	教育内容
1	宮津村	香風社 光西寺	坂埜 恵燈	僧侶	読・算
2	宮津村		新海奈岐佐	神官	読・算
3	宮津村	谷性寺			
4	白沢村		前野又左衛門	平民	読・書・算
5	白沢村	宝安寺	西沢 良什	僧侶	読・書・算
6	福住村	興昌寺	大村 大棟	僧侶	読・書
7	板山村		岡戸久右衛門	平民（農）	読・書・算
8	板山村		田中 庄太郎	平民（農）	読・書・算
9	板山村	安楽寺	十世禅応徹宗	僧侶	
10	板山村		山本 徹宗	僧侶	読
11	坂部村	洞雲院	魯筌 保国	僧侶	読
12	草木村	浄土寺	竹内 典	僧侶	読・書・算
13	高岡村	友松堂	舟橋 隆益	医者	読・書・算
14	角岡村	平泉寺 薬師堂	竹内 秀恵	僧侶	読・算
15	角岡村		新海 秀体	僧侶	読・書・算
16	大古根村	蓮慶寺		僧侶	
17	卯之山村	最勝寺	秀成法師	僧侶	
18	卯之山村	弘誓院	代々住職	僧侶	

『愛知県教育史（古代・中世・近世編）別冊』より作成

江戸時代には庶民教育を対象とした寺子屋が多く開かれました。これまでは、教育を受けたのは裕福な家の子弟だけだと考えられてきましたが、人数をみるとあながちそうとばかりは言えず、読み・書きを習った者は、かなり多かったと思われます。しかし、男子がほとんどでした。女子は、裁縫や行儀作法を身につけるため、村の庄屋や神官の妻女のもとへ、針子や見習いとしてあがりました。

第3節　村の様子

● 村の変化

尾張藩は、1671年（寛文（かんぶん）11年）5月、領内の村の状況を知るため、すべての村から「村高等諸事書上ケ帳」を提出させました。この文書は『寛文村々覚書（かんぶんむらむらおぼえがき）』といい、各村の村高・戸数・人口・社寺・用水などについて詳しく記されています。『寛文村々覚書』に書かれている阿久比の各村の戸数・人口をみると、どの村も戸数が100戸に満たない、小さな村だったことがわかります。なかでも、椋原村は15戸98人と、たいへん小さな村でした。比較的大きな村は、宮津村と草木村で、人口が500人を超えています。

また、19世紀に入ったころの様子を伝える史料として『尾張徇行記』と『天保の村絵図』があります。

『尾張徇行記』は、尾張藩士樋口好古が、1792年（寛政4年）から1822年（文政5年）まで、約30年にわたって尾張藩内の村々を見てまわり、年貢・戸数・人口・社寺や産業など、村の様子を詳しく書いたものです。

「天保の村絵図」は、1841年（天保12年）に尾張藩の命令によって作られた各村の絵図で、阿久比に関しては16か村のものがすべて残されています。これには、その村の本田・新田・山・池・用水などが色分けされて描かれています。

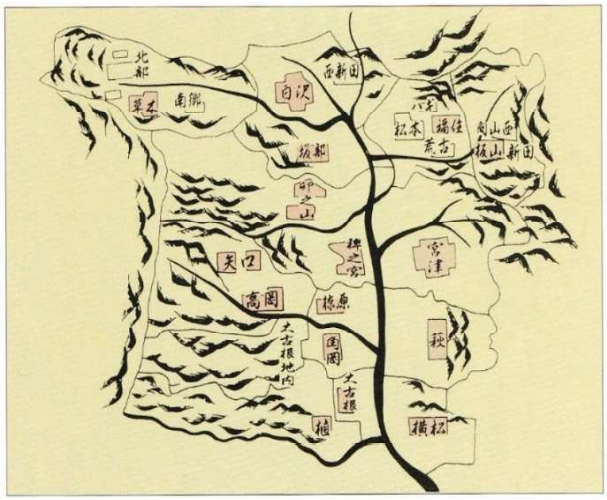
村名	寛文11年（1671）				文政5年（1822）			
	戸数	人数	1戸あたり人数	牛馬数	戸数	人数	1戸あたり人数	牛馬数
横松	35	177	5.0	11	80	369	4.6	0
萩	27	207	7.7	11	60	246	4.1	0
宮津	70	532	7.6	21	172	745	4.3	15
板山	37	210	5.7	13	112	494	4.4	10
福住	39	232	5.9	12	99	433	4.4	0
白沢	41	242	5.9	18	104	416	4.0	7
草木	68	538	7.9	41	192	853	4.4	14
坂部	32	208	6.5	11	77	336	4.4	8
卯之山	63	417	6.6	18	135	622	4.6	18
稗之宮	45	302	6.7	13	103	468	4.5	8
椋原	15	98	6.5	8	25	120	4.8	2
角岡	25	149	6.0	7	39	155	4.0	0
矢口	42	213	5.1	22	68	302	4.4	12
高岡	31	182	5.9	15	75	293	3.9	3
植	72	399	4.1	22	144	593	4.1	2
大古根	64	369	4.1	21	109	444	4.1	0
合計	706	4475	6.3	264	1594	6889	4.3	99

戸数・人口・牛馬数の変化

● 英比谷16か村

英比の郷は、その東と西を丘陵で囲まれています。郷のほぼ中央を北から南に流れる英比川と、そこに流れ込むいく本かの支流に沿って、16の村が形成されているので、「阿久比谷16か村」と呼ばれました。川の流れに沿った低地に耕地が広がり、耕地と丘陵のあいだに集落が形成されています。英比川と丘陵地の谷間を東西に流れる英比川の支流は、古くから農民たちに大きな恩恵を与えてくれました。阿久比の村々は、英比川の水を利用して農業を営みました。また、村々が協力しあって洪水から田畑を守りました。

このように、郷全体が英比川とその支流に対する一つの共同体としてまとまっていたので、「英比輪中16か村」とも呼ばれていました。18世紀末から19世紀前半にかけての阿久比の村々の様子を、『尾張徇行記』と「天保の村絵図」（徳川林政史研究所所蔵）からみてみましょう。（村絵図はすべて北を上に配置しています。）

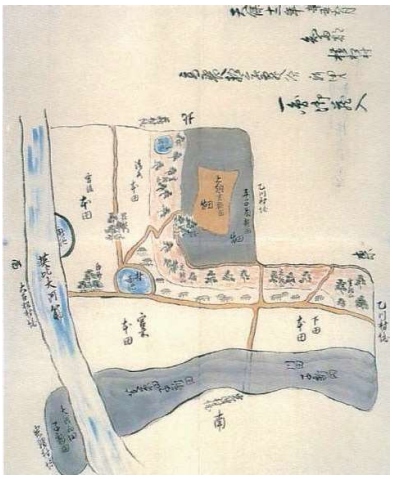


英比谷16か村（「尾張志付図智多郡図」より抜粋）

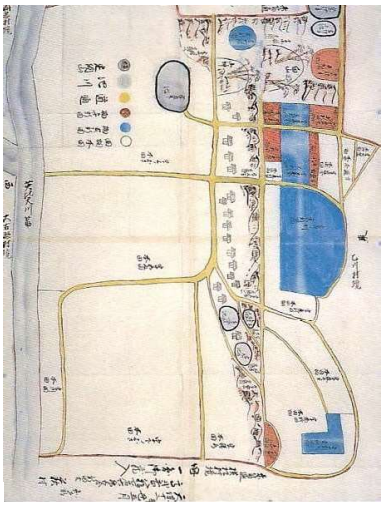
● 横松村

東西約870 m、南北約330 mの村で、西の村境を英比川が流れています。南の岩滑村境に沿う新田は、英比川が洪水によってその流れを変えたため、旧河道を耕地としたものです。民家は、村の東の丘陵地のすそ野の小高い場所に細長く連なっています。

戸数に比べて耕地が少ないので、農業以外に大工が20人ほどいて、半田・乙川・亀崎や三河あたりまで出向いています。彼らは、「横松大工」と呼ばれ、その技術は高く評価されていました。英比川の堤防決壊でたびたび水害に見舞われましたが、このような技術者の存在と収入が、村人の生活の助けとなっていました。



● 萩　村

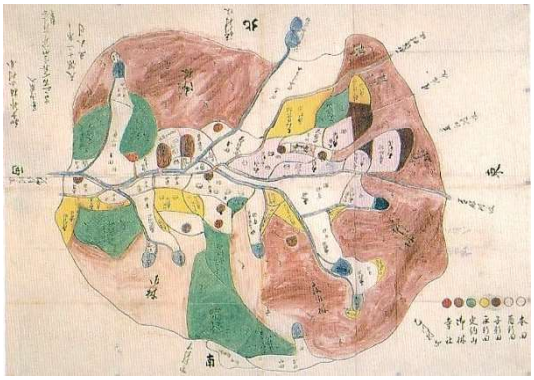


東西約 490 m、南北約 550 mの村で、西の村境を英比川が流れ、東は丘陵地が南北に連なっています。民家は、丘陵地のすそ野の小高い場所を南北に細長く立ちならんでいます。耕地は、集落の東の丘陵地に本田畑や新田畑があり、西には英比川の氾濫によってできた沖積地に本田が広がっています。耕地の少ない農民ばかりで、暮らし向きは楽でなく、小作人として、乙川村・横松村の田畑を借りて耕作している者がいました。農業の合間に黒鍬稼ぎに出かけたり、酒屋の杜氏に雇われていく者もいました。

● 宮津村

東西約 1,200 m、南北約 1,090 mの広い村で、北と東に丘陵地が続き、南と西は平たん地で田が広がっています。村の中央を蟹田川が東から西に流れ、西の村境を流れる英比川に合流しています。民家は、蟹田川の南に社寺を中心にして立ちならんでいます。南北に通じる道路には、いずれも蟹田川に橋がかけられ、集落と田畑、他村への往来に重要な役割を果たしていました。畑の面積はわずかしかなかったので、農閑期には黒鍬稼ぎや酒屋の杜氏に出かけていました。特に、杜氏の出稼ぎが盛んで、2戸に1人は出かけており、「宮津酒六」と呼ばれていました。

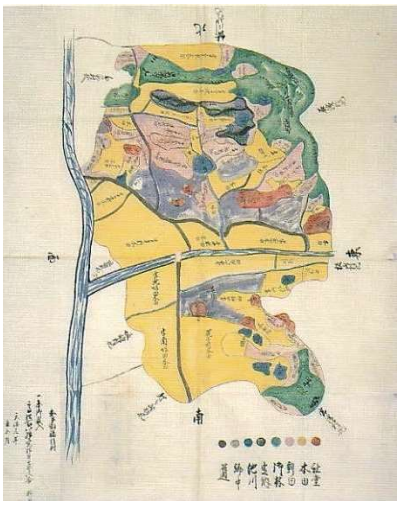
● 板山村



東西約 1,000 m、南北約 890 mで、村の周りを丘陵で囲まれ、孤立した形の1村としてまとまっています。

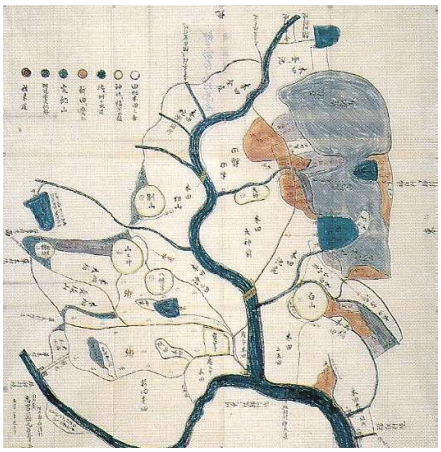
集落や耕地は、村のほぼ中央を東西に流れる福山川に沿って発達しています。村を取り囲む丘陵は、ほとんど藩が管理する御林になっており、村の人々は自由に利用することはできませんでした。畑は少なく、砂混じりの土のために、麦や大豆を多く作っていました。人口増加率がもっとも高い村で、田畑として利用可能な場所は次々と開墾し、耕地を増やしました。しかし、戸数に比べて耕地が少ないため、農閑期には、酒屋の杜氏や黒鍬稼ぎに出かけ、生活を支えていました。

● 福住村



南北に長い村で、村のほぼ中央を福山川が東西に流れ、西の村境を流れる英比川に合流しています。民家は、福山川を隔てて北側と南側のやや小高いところに、神社を中心にして立ちならんでいます。田は川に沿って広がっており、畑は丘陵地に開かれ、麦や大豆を多く作っています。肥料は灰が主で、干鰯も少し使います。灰は、有脇村の灰問屋から購入していました。豊かな農家は2、3戸あるだけで、耕地が少ない農家が多く、農閑期には30人ほどが黒鍬稼ぎとして出稼ぎをしていました。また、商売を営む者や、木綿の仲買をする者もいました。

● **白沢村**

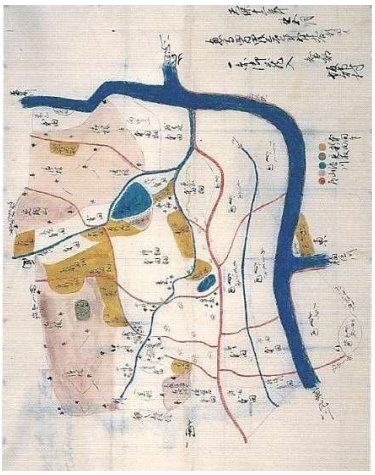


村全体が谷になっているため、たくさんの河川と雨池（あまいけ）があります。草木川が、南の村境を西から東に流れ、村のほぼ中央を北から南に流れる英比川に合流しています。民家は、英比川西側の丘陵地に集中し、東側には1、2軒あるだけです。田は、英比川沿いの平たん地と草木川の北側に広がっていますが、耕地に比べて戸数が多く、隣村から田畑を借りて耕作する者がいます。農閑期には、5、60人も黒鍬稼ぎに出ています。ここは、2戸に1人の割合と、黒鍬稼ぎが盛んな村です。

● **草木村**

東西約1,960 m、南北約980 mの英比谷でもっとも広い村です。周りを丘陵で囲まれ、村の中心を草木川が西から東に流れており、川の周囲の低地に田が広がっています。英比谷16か村の中では例外的に大野荘に属していました。民家は、「北の郷」と「南の郷」に分かれ、芳池川の北と南のやや小高い場所に集中しています。畑作では、麦・大豆のほかに茶を作っています。水害・干害もなく恵まれた耕地で、農業中心の村ですが、農閑期には、57、8人ほど黒鍬稼ぎに出ています。英比谷各村の藩への年貢米の輸送は、草木村を経由して大野村（常滑市）に出て、そこから船で名古屋まで運んでいました。

● **坂部村**



北と東の村境に英比川が流れています。村の東部に本田、西部に丘陵地、中央部に集落や本田畑があり、川の東沿いにも坂部村地があります。

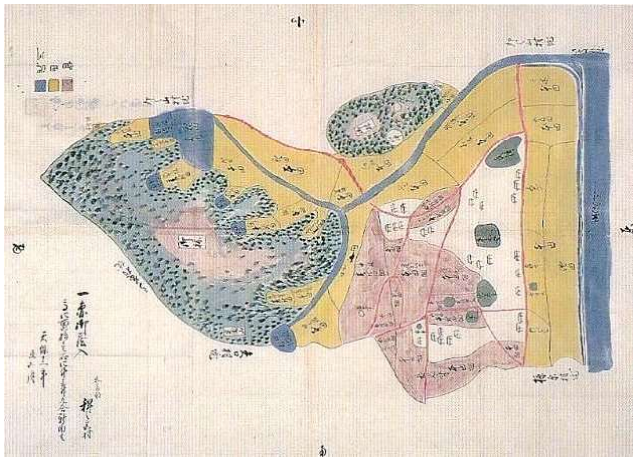
民家は、村の中央部を南北に走る道路の西側に集中しています。この道路は、英比川にかかる橋を渡り、白沢村を経て名古屋へ通じる往来道です。各地への道のりは、「名古屋へ八里、鳴海宿へ五里、横須賀村へ二里半」と記されています。英比川にかかる橋は、藩が直接普請や修理をする公儀橋（こうぎばし）です。田は排水が悪く、しばしば水害にあったため、取れ高も少なかったようです。農閑期には、黒鍬稼ぎや酒屋の杜氏に雇われ生活の助けとしていました。

● **卯之山村**

東西約3,270 m、南北約550 mの東西に細長い村で、村の東部を北から南に英比川が流れています。民家は、英比川の西側の丘陵地に南北に分かれて形成されています。田は、川の東西の平たん地に広がっていますが、谷間も開墾されて水田になっています。畑では、ムギ・ダイコン・ソバなどを作っていました。農家のほかに大工が6人ほどいました。また、黒

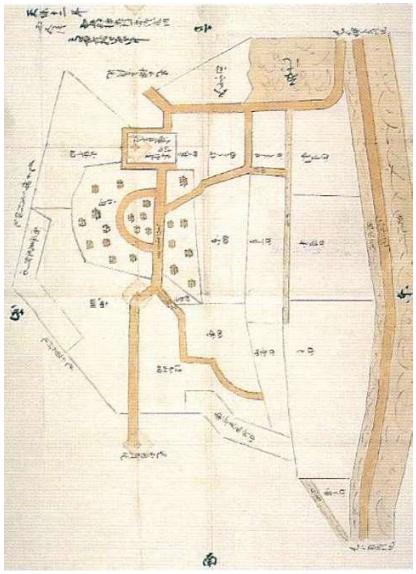
鍬稼ぎに出る者が14、5人いました。田畑やため池を造ったり、石積みなどの重労働が多く、三河の山間部や遠くは静岡まで出かけたと伝えられています。

● 稗之宮村



稗之宮村は現在の大字阿久比で東西に長い村です。村の北側を横川（殿越川）が西から東に流れ、東の村境を流れる英比川に合流しています。民家は、主に氏神（阿久比神社）の東を通る道路と氏神の西を通って椋原村へ抜ける道路にはさまれた丘陵地に集中しています。田は、英比川の東側の平たん地と横川沿いに、集落を包むように広がっています。戸数に比べて耕地が少ないので、矢口村・高岡村で小作をする者がいました。農閑期には、黒鍬稼ぎや酒屋の杜氏に雇われていく者がたくさんいました。このあたりで飼っている牛は、寺本村・古見村（知多市）の仲買人から買い入れたもので、奥州（おうしゅう）南部の出羽ノ庄（でわのしょう）や三河鳳来寺（ほうらいじ）から買ってきたものです。

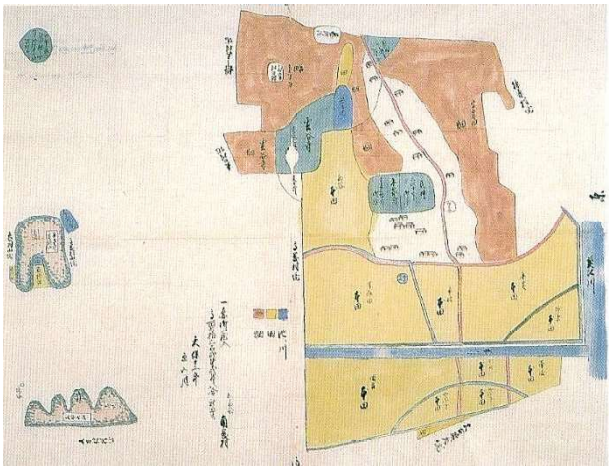
● 椋原村



東西約360 m、南北約240 mで、戸数・人口ともに最も少ない村です。現在の椋岡の北部地域にあたります。東の村境を英比川が北から南に流れ、川に沿って田が広がり、西側は丘陵地になっています。村の中央を「名古屋往来道」が通り、民家は、この道路の周辺に集中しています。村絵図には「名古屋往来道幅一間（1.8 m）」と記されています。当時の主要道路だったので、道幅が広くとってあります。

南側の水田は低地のため、大雨になると村全体の水田から水が集中し、大きな被害を受けました。当時の英比川は堤が低いので、大雨が降れば川の水が水田にあふれ、田舟に乗って宮津村まで行くことができたと伝えられています。山林はすべて開墾され、畑になっています。

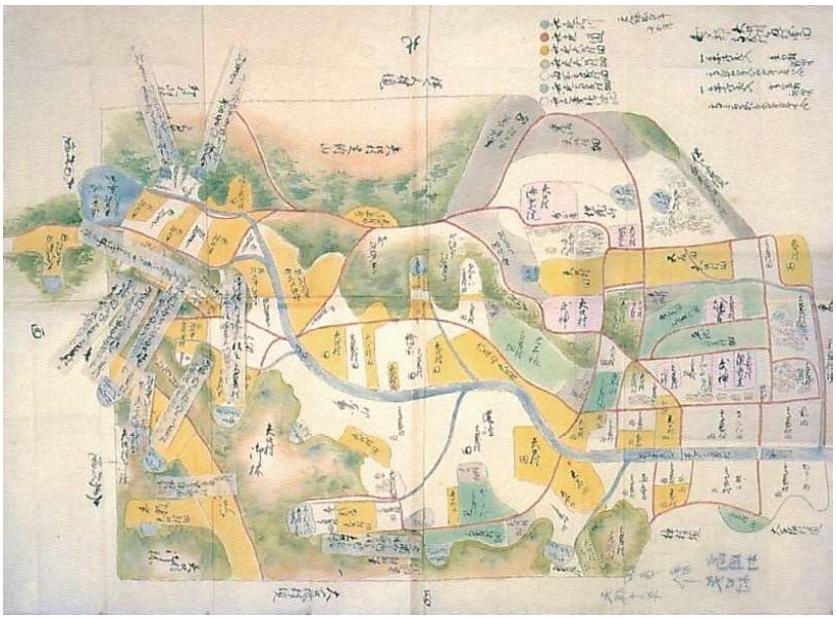
● 角岡村



東西約270 m、南北約350 mの小さな村で、現在の椋岡の南部地域にあたります。村の南側を西から東に前川（前田川）が流れ、東の村境を流れる英比川に合流しています。民家は、北部の小高い場所に立ち並び、竹木がよく茂っているため、遠くから眺めると島のようであったといわれています。畑は、これらの民家を取り囲むようにあります。田は、前川沿いに広がっています。農閑期には、12、3人ほど黒鍬稼ぎに出ていました。この村の活用できる土地は、すべて田畑になっており、日常生活に必要な薪（まき）などは、高岡村や稗之宮村にある飛地の山から得ていました。

● **矢口村**

現在の矢高の北部です。東西約 330 m、南北約 110 mと記されていますが、田畑・雨池・山林が高岡村と複雑に入り組んでいるため、村境がはっきりしません。民家は、村の東に集まっており、周りには竹やぶが茂っています。また、亀崎山や楪池の付近には、新田開発にともなう集落がありました。山林が多いので、農閑には柴や薪を近村へ売りにいき、生活の助けとしていました。また、黒鍬稼ぎに 15 人ほど出かけていました。瓦(かわら)職人が 1 人、それを手伝う者が 6 人ほどいて、関西方面まで出かけていました。



村の西部の亀崎山には、たくさんの柿の木があり、その実を酒屋に売っていました。酒造りの過程でじょうぶな袋が必要なため、柿の渋を木綿の袋に塗っていたのです。

● **高岡村**

現在の矢高の南部です。東西約 440 m、南北約 110 mと記されていますが、所有地が矢口村と複雑に入り組んでいるため、村境がはっきりしません。

民家は、村の東にある丘陵地の付近に集中しています。田畑の多くは、村の中央を西から東に流れる前川沿いに広がっています。このあたりは排水が悪いため、前川の川底に長さ約 33 mの伏越(ふせこし)水筒を通して、角岡村の田に水を流していました。

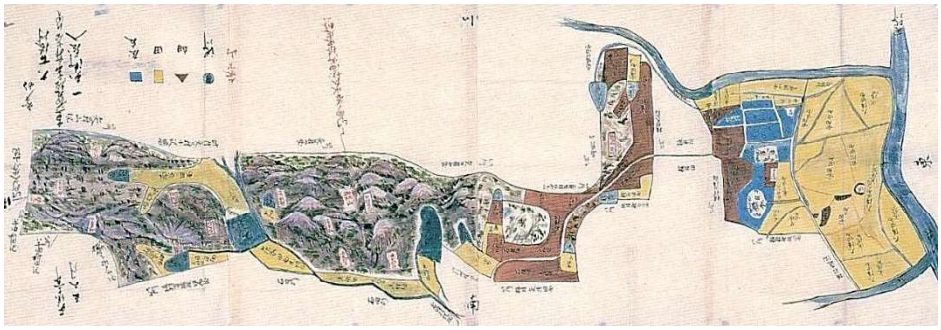
農閑期には、商売をする者が 2 人ほど、黒鍬稼ぎに出る者が数人いました。また、瓦職の手伝いをする者が 3 人ほどいて、関西方面まで出かけていました。

矢口村と高岡村は、所有地が複雑に入り組んでいるため、1 枚の村絵図に両村の様子が描かれています。

● **植村**

現在の植大の一部です。大古根村の所有地が入り込んでいるため、西部はかなり細長い地形になっています。南を一望すると矢勝川をはさんで岩滑村が広がっています。民家は、東北部の丘陵地に集中しています。田は、矢勝川沿いに広がっています。西部の丘陵地帯は、大部分が山林です。村には、紺屋や綿屋などが 2、3 軒ありました。紺屋とは、染物業のことです。また、瓦屋が 1 軒あり、信州のあたりまで稼ぎに出ていました。農閑期には、黒鍬稼ぎに 40 人ほど出ていました。

● 大古根村



現在の植大の一部です。村の三方は川に囲まれています。東には英比川が、南には矢勝川が、北には前川（前田川）が流れています。東西に細長い村ですが、途中、植村がこの村に入り込んでいるため、東と西に隔てられています。東側には、民家や本田が、西側には山林や新田畑が多くあります。英比川沿いの田は低地のため、農民は排水に苦労しました。大雨が降ると、しばしば水害に見舞われました。農閑期には、黒鍬稼ぎに 10 人から 20 人ほど出かけました。また、瓦職人が 1 人いて、信州のあたりまで出向いていました。

第 4 節　幕末の阿久比

● 海岸の守り

1778 年（安永（あんえい）7 年）、ロシア船が「蝦夷地（えぞち）」（北海道）に来て通商を求めたのを皮切りとして、日本の沿岸に外国船がしばしば訪れるようになりました。鎖国政策をとっていた幕府は、諸大名に対して外国船に備えて海岸の守りを固めるように命じました。

尾張藩では、1808 年（文化（ぶんか）5 年）浜方年寄役（はまかたとしよりやく）を設けて、難破したり漂流したりしている外国船の監視にあたらせ、さらに海岸防備を強化する政策を打ち出しました。特に知多半島は、東に三河湾、西に伊勢湾をもって太平洋上に突き出し、良港に恵まれていましたから、外国船の渡来が心配されました。そこで、外国船がやってきたという知らせを受けしだい、その地に急行する鉄砲隊・長鎗隊・大砲隊を編成しました。宮津村はこれらの役人たちに宿泊・休憩の場所を提供するよう命じられ、谷性寺・光西寺と 30 軒の村民の家に 775 人の役人や人夫が分宿する手はずになっていました。

宮津村には、尾張藩から申し渡された「異国船渡来守護」の触れ書きが残っています。これには、外国船がやってきたときは、組人数（1 組 50 人）を引き連れてすぐにその地にかけつけ、外国人が上陸して乱暴したら捕らえるようにといった内容の指示が記されていました。外国船に対する幕府や藩の緊張感は、村人にもひしひしと伝わってきたものと思われます。

大古根村庄屋の新美八兵衛は、外国船がやってきたときは、北方村・河和村にかけつけ、城下から役人が到着するまで上陸を阻むように命じられました。また、大砲を造るために寺院に釣り鐘を差し出すように命じたり、内海・師崎・亀崎などに烽火台（のろしだい）を建設したりするなど海岸の守りを強化しました。

知多郡の村々では、矢梨（やなし）村（美浜町）まで人足として出張するよう命じられました。宮津村では、海岸を守るために 6 カ月交替で 50 人ずつ動員されたという記録があります。半年間も農地を離れることは、村民にとってたいへん大きな痛手です。このように村民は、外国船に備えて海岸を守るために大きな負担を強いられました。しかし、村民の苦労や不安をよそに、知多半島へ外国船が姿を現すことは一度もありませんでした。

● 長州戦争と人夫

外国の圧力に負けて開国した幕府に対して不満をもった武士たちは、朝廷の力を借りて外国を打ち払おうと考えるようになりました。これら尊王攘夷派（そんのうじょういは）の中心は長州藩（ちょうしゅうはん）でした。幕府は諸藩に命じて長州藩を討つために軍をおこしました。征長軍の総督になったのが、尾張藩の前藩主徳川慶勝（よしかつ）でした。参謀に

は、薩摩藩の西郷吉之助（隆盛）が任命されました。

卯之山の最勝寺には、第1次長州戦争で人夫として呼び出された村民の名簿が残っています。卯之山村の竹内鎌三郎、板山村の岡戸良之助を中心として、55人の村民が人夫として働きました。

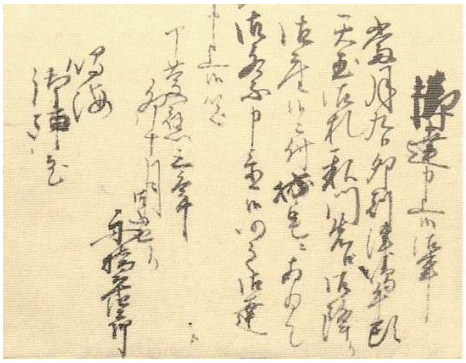
彼らは、1864年（元治元年）10月16日に鳴海を出発し、2カ月ほどかけて広島まで荷物を運びました。広島では、寺の警固や村々の見回りに従いましたが、長州藩の降伏により戦火を交えることなく戦争が終わり、到着後5日ほどで帰村の命令が出ました。しかし、全員が帰村というわけにはいかず、卯之山村の林右衛門をはじめとして10人が引き続き人夫として残ることになりました。帰村組は、同年12月31日、広島から船に乗り、大阪を経由して1月29日に阿久比に帰り着きました。第1次長州戦争では、人夫の呼び出しのほかにも、軍用金や飼葉・わらじ・梅干しを差し出すように命じられました。阿久比16か村からも、墨俣宿（岐阜県安八郡）へ人馬を差し出すよう命令があり、馬59頭、人足219人が物資の輸送のため動員させられました。この戦いでは、外国製の兵器を装備した長州藩が、幕府軍をさんざんに打ち破りました。

人夫数書上扣幷諸事覚帳

そのほかにも幕府が企図した公武合体による皇女和宮降嫁、徳川家康没後250年忌の日光御神忌などにかかわる人馬や物資の負担を強いられました。

● ええじゃないか騒動

1867年（慶応3年）10月9日、山廻り役を務める宮津村の舟橋平四郎家の門前に津島牛頭天王の御札が降りました。何者かが、神のしわざにことよせて、お札を降らせたわけですが、舟橋家ではさっそくお札をまつり、酒や餅などを供えました。このうわさを聞いた近所の人々が参拝と称して押しかけ、たいへんにぎわったといわれています。このとき、参拝者には酒がふるまわれ、酒に酔った人々が「ええじゃないか」とはやしたてながら、踊り狂ったといわれています。記録には残っていませんが、大古根の英比家にも、お札が降ったと伝えられています。もっといい世の中になってほしい、少しでも生活が楽になってほしいという人々の強い願いが、このような行動を起こしたのではないかと考えられます。


津島牛頭天王御札降り届留（要冊記）

知多郡では、舟橋家のほかに、西成岩村・半田村（半田市）、南知多の大井村などでもお札が降り、大勢の人々が押し寄せ、たいへんなにぎわいをみせたとの記録が残されています。こうした混乱の中、倒幕運動が進められ、ついに徳川慶喜は朝廷に大政奉還を願い出ました。